

< 図書紹介 >

須藤敏昭『遊びと労働の教育』

佐々木 享

表題は「遊びと労働の教育」であるが、「目次」からもわかるように、子どもの遊び、労働と労働教育、技術教育などの理論と実践を多面的に論じた書物である。これまで、労働と労働教育はあるいは技術教育をとりあげた著書や論文はあったが、遊びを教育(学)のテーマにとりあげたものは、私の知る限り、ほとんどなかった。その意味で、子どもの発達と遊びの問題を真正面から論じている点にこの書物の最大の特徴があるといつてよく、私たちは、遊びと労働の問題とを子どもの発達という統一的な視点から論じた書物を手にすることができるようになったことを喜びたい。

本書の内容はつぎのとおりである。

- 序章 子どもの発達と遊び・労働の教育
 - 一 労働・遊びと人間
 - 二 労働・遊びと子どもの発達の現状
 - 三 幼児期の遊びと労働
 - 四 学童期の遊びと労働
- 第一部 子どもの遊びとその指導
- I 子どもの発達と遊びの本質
 - 一 遊びの本質と遊びの指導
 - 二 遊びの分類
 - 三 子どもの発達と遊び
- II 遊びをどう指導するか
 - 一 競争の遊びの指導
 - 二 工作遊びの指導
 - 三 遊びの指導過程
- III 遊びと学習・労働
 - 一 遊びと学習
 - 二 遊びと労働
- 第二部 労働の教育

- I 手の労働と知能の発達
 - 一 不器用になった子どもの手
 - 二 子どもに「巧みな手」を
 - 三 「手の労働」とは何か
 - 四 手の労働と知能の発達
- II 労働教育の今日的意義
 - 一 労働教育の今日的意義
 - 二 恵那・上小学校の労働教育の実践
- III 労働教育の実践とその課題
 - 一 遊びから労働へ(幼児期の労働教育)
 - 二 教科学習の一環としての労働
 - 三 労働そのものの教育
 - 四 労働教育の特徴と今後の課題
- IV 労働をどう教えるか
 - 一 なぜ労働を教えるか
 - 二 労働をどう教えるか
- 第三部 技術の教育
- I 技術教育研究の今日的課題
 - 一 技術教育研究の今日的課題
 - 二 技術教育の内容と技術論
- II フランスにおける技術・職業教育の最近の動向
 - 一 アビ改革の経過
 - 二 アビ改革における技術教育
 - 三 民主的教育改革と技術教育
 - 四 民主的教育改革の技術教育論
- III 文献紹介・日本における総合技術教育論
 - 一 戦前日本の総合技術教育論
 - 二 戦後の生産教育論と総合技術教育論
 - 三 技術革新と総合技術教育論
 - 四 1970年代の総合技術教育論

文献年表・日本の総合技術教育論

みられるように、本書はたくさん話題をふくんでいるが、私の気づいた若干の論点を紹介しよう。

遊びは、もちろんおとなの生活においても一定の地歩を占めているが、それは、幼児期・学童期の子どもの世界において遊びが占める意味とは違っている。遊びの問題を吟味しようとしてきた数少ないこれまでの論者たちたとえば著者もしばしば援用しているカイヨワ（『遊びと人間』講談社文庫）においては、この区別があいまいであって、子どもの生活において遊びの占めている位置や役割が自覚的に掘り下げられていない。本書において著者が最も力を注いでいる論点のひとつはこの点にある。著者は、本書の全体をとおして遊びが子どもの発達に欠くことのできないものだというテーゼを論証しようとしているわけだが、それが説得的に読者にせまってくるのは、人間が人間らしくなるために不可欠なものである労働と子どもの遊びとの関係に着目しているからであり、また、至るところで引用されている子ども達の遊びと手労働の実践に裏うちされているからであろう。著者が、遊びの位置と役割を解明することに成功しているのは、著者が遊びの問題にだけ没頭する研究者ではなく、本書の構成にもみられるように、子どもの手の労働の問題、学童期から青年期にかけての技術教育の問題についても一定の見とおしと識見をもっているからである。

本書のもうひとつの特色は、子どもの「手の労働」の意義を掘りさげて検討している点にある。これまで、労働の教育的意義を論じた書物はないわけではなかったが、それらはしばしば原理論的であり抽象的であり、哲学的な議論に終始しがちであって、現実の子どもの生活、子どもが日々学ぶ学校教育とは無縁であるような議論にとどまることが多いという弱点をもっていた。著者はこの点でも、いっほうでは労働の教育的意義を、労働なし

には人間が人間たり得ないことを科学的に論証することに気をくばりながら、他方で、子どもの成長発達過程における遊びや身体の運動、そして手の労働の具体的な問題にそくして議論をすすめる、今日の小学校で工作教育が軽視されている実情にも説き及んでいる。ただこの点で欲をいえば、たしかに戦後の小学校の図画工作教育は、よくも悪くも美術教育に著しく傾斜してしまっているわけであるが、わが国初等教育で数十年の長きにわたって行なわれてきた手工教育あるいは工作教育の遺産に学ぶべきものがあるのかどうか、あるとすれば何なのかなどの問題についても、私たちが組織していかななくてはならない「手の労働」は無から始めなくてはならないというわけではないのだから、説き及んで欲しいように思う。これは、今後の研究への期待でもあるが。

生産労働に子どもを参加させるというテーゼについても、資本主義社会では不可能であるとか、資本主義社会における児童労働が子どもの人間性を肉体的道徳的に磨滅させてしまうという一般的な帰着させてしまうのではなく、「今日の日本の社会で、学童期に、社会的生産労働の過程に子どもを完全な意味で参加させることはできないが、社会的労働への子どもの側からの接近や一定の参加を保障することは可能だし、重要な意味をもつ」として、追求すべき課題として位置づけている。

著者の論策が思いつきで時事的なテーマをとりあげているのではなく、広い視野と周到な研究に裏づけられていることは、技術の教育を論じた第三部によく現われている。

紹介の順序があとさきになったが、著者の須藤敏昭氏は、技術教育研究会の常任委員であり、同時に、1973年に発足した「子どもの遊びと手の労働研究会」の代表委員として活躍している気鋭の教育学者である。本書の文章のいくつかは技教研や手労研の機関紙に発表したものに手をくわえたものである。多くの方に一読をすすめたい。（名古屋大学）
（B6判 235ページ 青木書店刊 1,400円）